

1. 第23次(昭和49年度)北太平洋母船式捕鯨の操業概要

1) 第3極洋丸船団

細 萱 安 彦 (株式会社 極洋)

第3極洋丸船団は5月23日千葉港を出港し、5月27日操業開始、8月30日操業終了、9月8日千葉港に帰港した。操業日数96日、往復航13日、出漁日数109日であった。捕獲頭数はナグスクジラ72頭、イワシクジラ623頭(内ニタリクジラ156頭)およびマッコウクジラ601頭(内雄456頭、雌145頭)であり、総生産は14,760吨であった。

(A) 操業概況

① 東経漁場(5月27日~6月13日、17日間:捕獲F2、Se34、Sp175)

先航調査船の発見を目標に33°N、165°E附近より操業開始し、30-33°N間を177°E迄逐次東進操業した。中緯度高気圧の圏内で好天が続きSe、Spを混獲し、捕獲ペースの維持を計った。しかし、Spは連日発見があったがSeの発見は少く、小型ばかりで歩留りは低下した。このため、例年の北側40°N附近のSe実績漁場に移動し、反復操業した。水温分布は全般的に昨年より約2℃低く時期尚早のためかSeの発見がうすく、1日当りSe2-3頭の捕鯨にとどまり、天候も不安定な状態が続き、捕獲の向上は望めなかった。従って例年よりも1ヶ月早く、西経漁場に移動した。

② 西経、アラスカ漁場(6月14日~8月12日、60日間:捕獲F70、Se433、Sp300)比較的 天候の安定していた35-38°N間を移動し西経漁場に入った。38-45°N間を調査船の発見を基に潮目を逐次東進し、6月末には137°Wに達した。終始高気圧の圏内で天候に恵まれたが時期尚早のためか発見はうすかった。6月末から7月初めにかけ天候の悪周期に入りこれをおぼすため一旦西進後、150°Wから45°N線中心に130°W迄逐次東進した。48°N132°W附近でF、Seが局所的に発見され、Fの捕獲枠は7月13日達成したが、Seの動きは早く、捕獲は意の如く延びなかった。

7月中旬には、水温分布が12、13北当時と似ていたため、一旦北上し、50°N以北に漁場を求めたが、Seの発見は少く、視界も不安定であったため、北側漁場を断念し南下した。

145°W附近より45°N線中心に水温13~15℃の潮目沿いを逐次西進し7月末に45°N160°W附近でSeのまとまった漁場を捕捉し、8月上旬迄反復操業した。ガス断続の日が多かったが、Seが次々に来遊して来たので捕獲の挽回と生産の向上を計ることが出来た。

しかし漁場は荒廃し、回復に日時を要する状況となったため、再び東側に漁場を求め、145°W附近迄逐次東進した。

天候は良好であったがSeの発見がうすく、Sp混獲で捕獲ピッチの維持に努めた。

③ 中緯度漁場(8月13日~8月30日、18日間:捕獲Br156、Sp126)

残頭数、残日数を勘案し、13日より逐次西進操業した。西経北側天候不安定の見通しで、且つ、東経北側もガスと時化で操業不可能な状況にあったので南側に下がり、昨年の発見等を参考に西経中緯度漁場に移った。水温は昨年より約2℃低かったが天候に恵まれ、Br漁場を捕捉、

高水温のため捕獲制限をし鮮度保持に努めた。8月28日Sp枠を達成し、8月30日には35
N、179EでSe枠を完了し、23次北鯨を終了した。

(B) 今年の特徴

- ① 今年太陽活動の極小期に当たっていたため異常気象海況が目立った。
- 例年6月には東経北側漁場で操業していたが今年、悪天候の連続で操業のタイミングがとれず、例年よりも1ヶ月早く西経漁場に転漁した。このため例年東経での操業が60%位を占めていたが本年は20%弱に留まり、東経でのF、大型Seの捕獲は少なかった。
 - 夏型の安定した天候の出現が例年より2週間程度遅れ又、秋型の天候になるのが早かった。アラスカ湾中央部の冷水域が最近数年間の実績より緯度で約2度南偏していた。水温分布は45N以北は2℃前後高目、以南は低目で顕著な収斂線が形成されていなかった。このためか例年目視される浮餌、ホタテクラゲ等の浮遊生物が殆ど見当らなかった。
- ② 西経アラスカ漁場に於てF枠達成後も、B・F混りの鯨群がかなり発見された。又鯨は局所的に密集しており、移動の足も早かった。

第3極洋丸船団の最近4年間(20⇨23北)の発見状況

(操業船のみ操業期間だけのもの)

年次 鯨種	20北(S46年)	21北(S47年)	22北(S48年)	23北(S49年)
F	368 (0.38)	297 (0.37)	273 (0.38)	276 (0.41)
Se	1250 (1.28)	1033 (1.29)	974 (1.36)	902 (1.34)
Sp	1215 (1.24)	827 (1.03)	767 (1.07)	931 (1.39)
B	24 (0.02)	46 (0.06)	124 (1.17)	97 (0.14)

()内は1隻1日当りの発見頭数

- Fの1隻1日当りの発見は殆ど一定になっており、22、23北では中緯度操業が全操業期間の約20%を占めているので、この期間を北側で操業すればFの発見は増加すると考えられ、Fは減少していない。
 - Seの1隻1日当りの発見は22北より増加しているが、これは22北より天候が安定している中緯度操業が行われ、Brの発見が加わっているためである。Brの発見頭数は22北155頭、23北335頭である。
 - Bの発見が22北より著しく増加していることから、Bの資源はかなり回復していると考えられる。
- ③ Spの発見はかなりあったが特に大型鯨多く、捕獲鯨の平均体長は44フィートで48フィート以上のものが約40%を占めていたことが目立った。
- ④ 8月操業した中緯度海域ではBrばかりでSeが混じっていなかった。又Brの胃内容物は殆

どオキアミ類やコペポータ類で小魚類は稀に捕食されている程度で、全体に満腹ないしそれに近い状態にある個体が多かったことも印象的であった。

2) 第3日新丸船団

古川文康 (大洋漁業株式会社)

捕鯨をめぐる環境は年毎に厳しさを増しているが、第23次(昭和49年次)北洋捕鯨は前次にくらべナガスクジラの捕獲枠が15%減っただけで、イワシクジラおよびマッコウクジラについては据置きになった。すなわち第3日新丸船団の捕獲枠はナガスクジラ72頭、イワシクジラ545頭およびマッコウクジラ601頭で、船団編成も昨年と同じく冷凍船なしの母船と捕鯨船7隻で5月21日横須賀を出港した。

(A) 第一回南方海区

期間： 5月25日～6月1日、8日間

捕獲： Se7頭、Br73頭、Sp60頭(オス56、メス4)

今年は東北沿岸で例年にくらべ冷水の勢力非常に強く、漁業に影響がでている報道があったので、東経漁場は時期尚早とみて、ひとまず南寄りのニタリクジラを狙うべく5月25日35°05'N、165°03'Eより操業を開始、漸次東南東へ操業した。幸い好天に恵れてニタリクジラの発見もボツあり、マッコウクジラも混獲しながら5月31日179°Eで反転し、イワシクジラを狙って北西方面へ操業した。

(B) 東経海区

期間： 6月2日～6月15日、14日間

捕獲： F2頭、Se47頭、Br7頭

やはり35°N以北に上ると天候悪く、風が収まればガスである。36～38°N、167°E付近でイワシクジラがボツ発見あったが天候悪く、またイワシクジラもまともならず東進操業とし、あと再び南下した。

(C) 第2回南方海区

期間： 6月16日～6月25日、10日間

捕獲： Se3頭、Br119頭、Sp36頭(オス28、メス8)

31°N線まで南下、表面水温20°Cとなりニタリクジラが見えてくる。雨と風が交互にあり、よい天気とは言えなかったがニタリクジラとマッコウクジラが共にボツ見え、漸次東進、操業した。ニタリクジラは生産が上らぬため、捕獲も200頭近くだったので174°W付近より北向き操業した。

(D) 西経海区

期間： 6月26日～9月6日、73日間

捕獲： F70頭、Se237頭、Sp423頭(オス376、メス47)

39°N、170°W付近へ北上したが、天候悪くそれ以上あがれず、南側で捨い歩いた。7月は